

# 学校と蓮田一寺子屋から小学校へ

## 《はじめに》

子どもから大人へと成長する過程には、いろいろな学びがあります。私たちは、将来進む道によって様々な教育の場が用意されており、それを自分の意志で選ぶことができますが、昔の人々はどうだったのでしょうか。これから春の新入学の季節を迎えるにあたって、蓮田にはどのような教育があったのか紹介していきます。

## 《庶民教育の歴史と寺子屋の普及》

### 1. 庶民教育の始まり

子どもを含めた庶民教育の場は、江戸時代に盛んになった寺子屋が有名です。当時は士農工商の身分制度があり、教育の場も、武士は藩校、武士以外の人々は寺子屋と区別されていました。

「寺子屋」の名は、鎌倉・室町時代に寺院で読み・書き・算を教えたことから生まれたといわれています。もともと僧侶はお経を読むために勉強をしていましたが、鎌倉・室町時代になると、出家して僧侶になる人をもっとたくさん育てようとする動きが出てきます。こうして、僧侶ではない人も寺院で学ぶ道が作られました。

江戸時代になると徳川幕府がキリスト教を禁止するため、人々に仏教などを信仰させようとなりました。そのため、庶民は寺院の檀家(一定の寺に墓地を持ちその寺を援助する家)となって仏教を信仰していることを証明してもらい、同時に子どもたちの教育を寺院にお願いするようになりました。こうして、僧侶以外でも読み・書きのできる人、また、それを教える人が出てきました。このようにして、寺子屋のような庶民のための私設の教育機関ができていったと考えられます。

### 2. 寺子屋の普及

江戸時代に入り平和な世が続く産業が一段と発展すると、お金の計算、帳簿の記入、名前や住所を書くことが庶民にも必要となってきました。子どもが自主的に勉強することはもともと

無理なことですが、社会全体がこのように変化してきたために、子どもを寺子屋で学ばせようとする親が増えていきました。寺子屋の先生を師匠と呼びましたが、師匠へのお礼は様々で、お金のほか、米や野菜、半紙などを渡していた例もあり、特にお金持ちでなくとも子どもを寺子屋で学ばせることができたようです。現滋賀県東近江市は、「近江商人の村」という特殊な地域ではありましたが、江戸時代末(19世紀後半)には村民の91%が寺子屋に入門していたことがわかっています。また、同時期、市内井沼村でも、男子に限れば約80%が寺子屋に通っていました。

寺子屋はまず、江戸や京都などの大都市で増え始め、18世紀頃から農村や漁村にも広がっていきました。『日本教育史資料』(明治23~25年文部省刊)によると江戸時代の終わりには全国に16,560軒の寺子屋があったとされています。埼玉県では昭和40年代に行った調査の結果、県内に828軒の寺子屋と1,120名の師匠の存在が確認されました。資料がなくなっている所も多数あることを考えると実際には1,000を超える寺子屋があったのではないかと思います。

### 3. 寺子屋の教育

寺子屋に入門することを「登山」、やめることを「下山」、現在の「新入学」は「初登山」と言いました。寺子屋に入ると最初は「いろは」を読み書きすることから始めました。

寺子屋で広く使われた教科書は、『庭訓往来』(習字・手紙)、『塵劫記』(算数)があります。『庭訓往来』の「往来」とは手紙のやり取りのことで、11世紀後半に実際にやり取りした手紙を習字の手本としたことから、一般に教科書類を「往来」と呼ぶようになりました。全国では7,000種類ぐらいの「往来」が



「初登山御手本」(石井家)



「庭訓往来」(小山家)

あったと言われますが、これほど種類が多いのは、師匠が子どもたちの教育内容に合わせて自分で教科書を作ったことに加え、『商売往来』、『農業往来』(産業)、『東海道往来』、『川越往来』(地理)など様々な分野の教科書が作られたことが理由です。

寺子屋の師匠は現代と同じように、教科書を使って読み・書き・算を教える一方で、子どもたちの生活指導やしつけにも力を入れました。生活時間、学習習慣、通学途上の注意、無駄遣いの禁止、火の用心、友達づきあい、来客に対する作法、清潔、清掃など生活上の細かい点まで、子どもたちへの愛情を持って指導したと言われます。寺子屋で築かれた、師匠と弟子(生徒)との関係は一生続き、師匠は慕われ尊敬されたようです。その証拠に師匠が亡くなった時には、弟子たちが師匠のために墓碑を建てて敬愛の気持ちを表しました。墓碑では弟子たちのことを「孝弟」、「筆弟」、「筆子」などという言葉で表しているため、こ



南江筆塚碑(江ヶ崎)

うした墓碑を「筆子塚」と呼びます。蓮田にもこのような墓碑がいくつかあり、その中で筆子塚と確認できたものを今回の展示でご紹介しています。

[展示資料「筆子塚・寺子屋分布図」参照]

#### 4. 世界一の識字率 ～江戸時代の日本～

識字率とは「字を読んだり書いたりできる人の割合」です。19世紀中頃の江戸の寺子屋生徒数から考えると、識字率は江戸では70～80%ぐらいになります。当時の日本では国全体でも男性40～51%、女性15～21%と、同時期のロンド

ンの20%、パリの10%未満をはるかに超えていました。1853年に黒船で来航したアメリカのペリーも『ペルリ提督日本遠征記』の中で、日本で本が安く大量に売られていることに驚き、「教育は同帝国至る所に普及して居り」と、教育が行き渡っている様子を評価しています。これはたくさんの庶民が寺子屋で学んでいたためと思われます。

#### 5. 蓮田の寺子屋

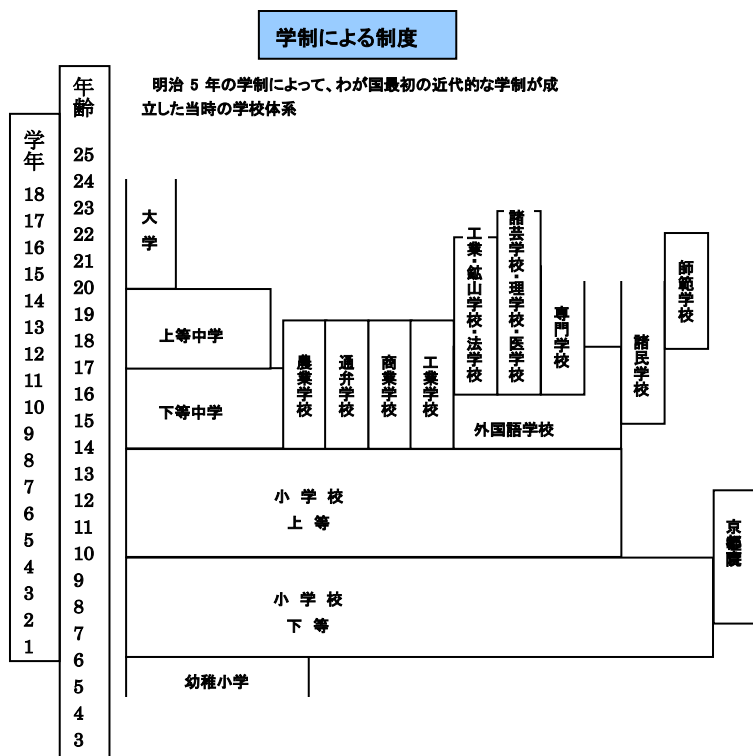
埼玉県では、江戸時代の初め(17世紀初め)、寺子屋の師匠は僧侶が多かったのですが、18世紀中頃から武士、村役人、農民など様々な身分の人が師匠となっていきます。特に江戸時代の終わり頃には農民出身の師匠が急速に増えます。寺子屋で学んだ人々が師匠となる例が増えたからだと考えられます。

蓮田の井沼にあった寺子屋「松齡堂」の師匠、栗原清五郎もそのような農民出身の師匠であったようです。当時の井沼には大地主と言える様な農民はなく、貧富の差があまりありませんでした。松齡堂にはどちらかと言うと収入の低い家の子も通っていて、師匠に対するお礼は高額ではなかったと考えられます。地域の人々にとって気楽に入学できる寺子屋だったのでしょう。松齡堂では天保11(1840)年～文久4(1864)年の24年間に、延べ305人の生徒が通っていました。そのうち男子が281人と圧倒的に多く、女子は約8%でした。初登山の年齢は男女とも9歳頃(数え年)が一番多く、男子は3～6年、女子は3年くらい通う人が多かったようです。

松齡堂の他にも蓮田には8軒の寺子屋があったことがわかっています。そのうち、駒崎の寺子屋師匠 岩崎誠次郎と根金の内村兼吉は共に栗原清五郎の弟子でした。また、江ヶ崎の久伊豆神社は、宮司が代々寺子屋の師匠を務めていて「南学堂」と呼ばれていました。ここでは、漢学(中国の学問)や絵の授業が中心で、他の寺子屋とは教育内容が違っていたようです。南学堂は場所や師匠の経歴などがはっきりしていて、使われた教科書類も保存されており、当時の貴重な資料を伝えてくれています。

[展示資料「市内寺子屋一覧」参照]

## 《学校教育の始まり》



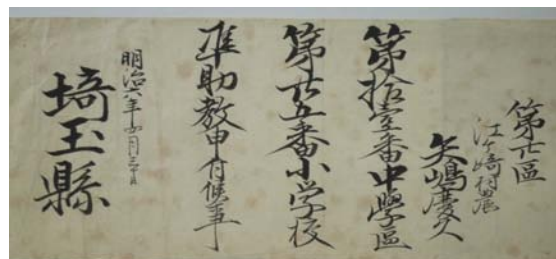
### 1. 学制公布 ～小学校開設へ～

1868年、徳川幕府が倒れ、明治新政府が誕生しました。新政府は日本を世界の大国に負けないような近代国家にしようと考えました。そのために、欧米の近代文明を学んで取り入れるとともに、日本人全体を教育してレベルアップさせることにしました。こうして、明治5(1872)年に学制が公布され、小学校の設置が計画されました。寺子屋も小学校も庶民のための初等教育機関という点では同じですが、寺子屋が私設の教育機関で、その目的は日常生活に必要な教育をすることであったのに対し、小学校は公立の教育機関であり、近代的な国を作るために国民を育成するという目的を持っていた点が違いました。また、「どの家にも学校にいかない子どもが一人もいないようにする」と宣言され、小学校は義務教育となりました。

明治政府は計画を実行するために文部省を置き、学区制を取り入れました。全国を53,760小学校区に分け、それぞれに小学校を1校設置する計画でした。さらに210の小学区を1中学区と

して全国に256の中学校を、32の中学区を1大学区として全国に8の大学を設けることとしました。文部省はまず、小学校の開設から始めました。これは急速に進められ、3～4年の間に26,000ほどの小学校が設置されました。中学校については、学区制によって設置する企画は実行されませんでした。大学は学制発布後5年経った明治10年に、東京大学が1校開設されただけでした。

計画された数には達しませんでした。短期間にこれだけの数の小学校を開設できたのは、各府県がただちに小学区を編成したことや、ここに小学校1校を設置することを目標に学制実施にあたった地域住民の努力もさることながら、各地に存在した寺子屋の果たした役割も大きかったようです。寺子屋は多くの小学校に転換され、近代教育への橋渡しの役割を果たし、寺子屋の師匠も多数、小学校の教員に任命されました。江ヶ崎南学堂の師匠、矢嶋慶久も明治6年に現さいたま市の田島小学校の教員に任命されています。(写真)



矢嶋慶久氏への辞令(矢島家)

蓮田市域は第11番中学区に属し、151～169番の小学区が決められました。市域で最も早く小学校が設置されたのは明治5年に開校された根金学校と言われていたが、実態は不明です。その後、明治6年4月に閩戸学校が秀源寺に、同年6月には蓮田学校が慶福寺に、黒浜学校が真浄寺に開校されました。同じ頃、寺子屋南学堂より引き続き江ヶ崎学校が設立されました。さらに9年4月には上平野学校が平源寺に設立されています。 [展示資料「学校変遷」参照]

### 2. 地域が支えた学校教育

新政府にとって、予算として今までほとんどなかった教育費を捻出するのは大変でした。市

町村でも当初小学校維持のために、授業料の他、学区の住民から税金と同じように学費を徴収していました。また、埼玉県では金穀を蓄積してその利子を各校に配布する制度を取り入れましたが、それでも費用が足りず、蓮田市域でも学区内の有志から寄付を募っていました。学校経費はその70～85%ほどが教員給料でした。少ない予算の中で、教員の確保が第一優先であったことがうかがわれます。

義務教育の制度が定められて20年経った明治25年でも、全国の就学率は50%に達しませんでした。これは、人々にとって授業料の負担がかなり重かったためと考えられます。特に埼玉県では約38%と全国平均を10%以上下回っていました。このため、蓮田市域でも、貧富の差に応じて授業料の等級制を取り入れるなど、なるべく家庭の負担が少なくなるよう工夫をしていました。また、明治23年には大洪水で市域も大きな被害を受けました。この影響で地方税未納者が多く出て、学校をめぐる財政はさらに苦しくなりました。黒浜村では尋常小学校が大破しましたが、新築費用を調達できませんでした。そこで、明治26年の黒浜村議会では、黒浜官有林の払い下げを願い出ることが決議されました。さらに、払い下げ代金または不足する分は、村で一定以上の収入がある者が特別に負担することや、新築に必要な人夫は、村人に賦役として課すことなどが話し合われました。こうした村民の努力により、黒浜尋常小学校は再建され、後には高等科も併設されることとなりました。

1小学区に1校をという地域の人々の熱意に始まり、財源の確保や災害などの困難を乗り越えて、蓮田の学校教育は現在まで拡大発展してきました。

### 3. 家族で参加した学校行事

明治33年に学校教育は無償となり、埼玉県でも就学率は90%を超えました。しかし、経済的な理由で中途退学したり連続欠席したりする児童も少なくありませんでした。大正時代に入ると市内の各村でも学校財政安定化に力を入れ、

少しずつ効果が現れてきました。しかし同時に国全体で戦争の色が濃くなっていき、昭和に入ると物資の不足や教育内容の変更など学校教育にも様々な制約が出てきました。そのような情勢の中でも子ども達への教育は地域の人々に大事にされ、学校行事にも家族で参加する家庭が多かったようです。市内に残る昭和初期の日記などから学校行事を拾い一覧にしたものが表1です。入学式・運動会・学芸会など主な行事は今と変わりません。修学旅行では日光に行ったという記録もありました。今回の展示では、昭和16(1941)年の日記から小学校の運動会当日の朝の様子を紹介しています。「待ちに待った運動会」という記述があり、戦時中でもお寿司を作り家族で出かける用意をしています。学校行事が家庭の一大イベントであったことがうかがわれます。

[展示資料[日記]参照]

【昭和初期の小学校年間予定表】 表1

4/6	入学式
4/7	始業式(1学期)
7/31	終業式(1学期)
8/1～31	夏季休業
9/1	始業式(2学期)
11/中旬	運動会
12/24	終業式(2学期)
12/25～	
1/7	冬季休業
1/8	始業式(3学期)
2/中旬	学芸会
3/末	修学旅行
3/29	終業式(3学期)・証書授与式
3/30・31	学年末休業
4/1～5	春季休業

### 《おわりに》

現在も学校行事には、地域の皆さんが様々な形で参加されています。下校時の見守り隊・防犯パトロールなどのボランティアや専門的な知識・技能を活かしたゲストティーチャーとしての活動などは新しい支援形態として定着してきました。地域の人々は、今後も子ども達や学校教育を支えていくことでしょう。

参考文献：「埼玉県教育史」「蓮田市史通史編」「日本庶民教育史」